

特定分野に特異な才能を持つ者に対する指導及び支援の在り方について

多様なニーズに応じた教育や、特異な才能を持つ子供に対する、いわゆるギフテッド教育に向けては、経産省の研究会では、「学びの自立化・個別最適化」の実現が急務であり、「みんなで同じことを、同じペースで、同じようなやり方で」教育していることが「落ちこぼれ・吹きこぼれ」を生み出していると提言しています。

つまり、「一律・一斉・一方向型の教育」から脱して、オルタナティブ教育に代表されるように、興味・関心や能力等に応じて、場所、進度、時間割、教材等の個別化を積極的に進めるよう促していると考えられます。

日本の教育は、「資料3のこれまでの審議経過（案）」にも示されているように、ある一定の期間の中で、個々人の成長に必要な時間のかかり方を多様に許容し包含するという側面や、過度の同調性や画一性などの課題も指摘されています。

一方で、世界的に評価の高い「日本型教育」のお家芸である、

- ・学校教育は児童生徒の資質・能力をバランスよく育成する
- ・学校ならではの協働的な学びを大切にする
- ・教科等を学ぶ本質的な意義を伝えること

などは、今後の学校教育においても重視する必要があると考えます。

学校現場の現状を踏まえ、これらに関連した内容として、「一斉授業」と「個人差に応じた指導」について、意見を申し上げます。

まず、一斉授業についてですが、この用語を悪者扱いした表現が最近多いように思います。一斉授業とは、チョーク&トークを中心とした、一方的な知識伝達型の教師主導の授業と広く思われているのではないのでしょうか。

優れた教師による優れた一斉授業は、ICT等の教具を有効に活用しつつ、個人差に応じた指導や、児童生徒の対話的・協働的な学びの実現、また、多様な他者と共に問題の発見や解決に挑む授業展開がなされています。（教師の個人差はありますが）

次に、個人差に応じた指導についてですが、個人差というと「達成度」や「理解度」ばかりに目が行きがちですが、学習速度、学習意欲や態度、興味・関心など様々あります。従来から、達成度や学習にかかる時間の差や理解の速さや深さといった（量的差異・個人間の差異）で個人差を捉える「個別化」、一方、興味・関心や生活経験的背景、学習スタイルなどの差（質的差異・個人内差異）として個人差を捉える「個性化」があることは知られています。これらの指導を一斉授業の中で行ってきているわけですが、特異な才能を持つ者に対する指導という視点からは、「発展的な学習」の充実が大切であると考えています。

発展的な学習は、個別化の視点からの先取り学習（早修）や、個性化の視点からの学習（拡充）として実施されていますが、指導のための授業時数の確保、知識及び技能の一部の習得を過度に重視してしまい学習が深まらなかったり、個別学習のみで学習を終えて（学習の孤立化）しまったりと様々な課題もあるのが現状です。

特異な才能を持つ者に対する指導及び支援については、確かに、現状では、指導の充実に加え「学びの選択肢」の少なさが課題であり、今後は、「民間教育と公教育の壁」や「教育と社会の壁」をもっと溶解し融合させていく必要もあるものと考えます。

しかし、革新的な教育手法等を決めようとしても、制度や法的障壁に加え、教育行政や学校現場にも配慮する必要があります。そこで、

- ・常に同じ学級や学年と同じように学ぶという発想に過度にとらわれすぎない
- ・履修主義と修得主義を適切に組み合わせ、各長所を取り入れる教育課程の在り方等を学校現場で積極的に研究するなど、まだまだとれる可能性はあると思っています。

さらに、特異な才能を持つ者に対する指導及び支援に関しては、学校教育だけでなく、見えにくい2E（twice exceptional）などを、幼少期のうちから見つけ救い伸ばすことが重要であると思っています。